

サイレント・ベビー——静かな赤ちゃんが増えている

柳澤 慧

小児科柳澤医院院長(山口県小郡町)

乳児の発達には運動機能の発達のみならず、心理・精神面でも目覚ましいものがある。毎日が発達である、と言っても過言ではない。その度合いは、個々において異なるものの、乳児期の発達はプログラム通りに実行される。しかし、それぞれの段階において適切な刺激が加わらなければプログラムは活性化されず、結果として発達の異常や遅滞を伴う。

日常の診療や乳児健診などでも、あまり泣かず、静かで、活気や表情に乏しい赤ちゃんを診ることがある。泣かないだけでなく、笑いや喃語、手足の運動なども少なく、「手のかからない静かな赤ちゃん」と受け止められやすい。このような赤ちゃんを、「サイレント・ベビー」と呼んでいる。

サイレント・ベビーは表情に乏しく、赤ちゃん特有の愛くるしさが失われる。その原因の一つに、母子間のコミュニケーション(いわゆるスキンシップもその一つ)の欠如を挙げることができる。欠如する要因として幾つかのものが考えられるが、基本的には母親と赤ちゃんとの関わる時間が少なくなったことである。その原因は、乳児期早期の物理的・心理的母子分離と、コミュニケーションを阻害する、育児用品の氾濫とその無選択的な受け入れにある。また、すでに確立されている「子どもは社会が育てるもの」とする

社会的認知は、誤っているとは言えないまでも、必要悪とも言える0歳児保育の無批判的導入が、代理育児・外注育児を容認する結果となった。子どもの視

点に立たないこれらの問題は、しかし、いわゆる育児休業法によって解決され得るものである。

工業発展国にみる母子の早期分離や、手抜きや他人任せの子育て、更には小児虐待にも繋がりがねないこのような育児文化は、子どもの精神発達を容易に阻害するものである。そうならないためにも、これからの助産学は、母親のみならず、新生児・乳児の精神発達の面にも目を向けなければならない。

最近の論文に、モーツァルトの曲が子どもの脳の発達に与える効果を否定するものもあるが、これはあくまでも知能に関してのものであり、心や情緒の面から考えれば、無駄であるとは決め付けられない。胎児に記憶が存在することは、すでに医学的にも証明されているが、このこと

は「胎教」の意味を今一度考え直す機会を与えた。

サイレント・ベビーへの対応は比較的簡単で、母子の関わりを質、量共に豊富にすることである。具体的には、赤ちゃんを抱き、目と目を合わせて、笑顔で語りかける(マザーリーズ; やや高い声でゆっくり話す「母親語」を用いる)ことに尽きる。介入が早ければ早いほど、容易に本来の赤ちゃんらしさを取り戻すことができる。このような対応は、乳児期全般にわたっての大切な技術であり、すでに新生児室で行なわれるべきものである。

赤ちゃんの心は、周囲の保育者の関わりによって萌芽し、愛着によって醸成される。

